

「一人ひとりは大切」とダイバーシティ

石川 立

奨励者紹介〔いしかわ・りつ〕

同志社大学神学部教授

日本キリスト教団牧師

〔研究テーマ〕聖書の神学的・哲学的解釈、解釈学、教父学

そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、霊による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

（フィリピの信徒への手紙 2章1—11節）

ダイバーシティについて

今朝のチャペル・アワーは創立記念礼拝ですので、校祖・新島襄が残したいいくつかの大切な言葉のうちの一つを取り上げ、味わいたと思います。

今朝取り上げるのは「一人ひとりは大切」という言葉です。新島が実際に述べた、より正確な言い方ですと、「諸君ヨ、一人ハ大切ナリ。一人ハ大切ナリ」となります。

昨今、マスコミを通して、いろいろなキーワードが発信されています。なかでも、よく耳にし、目にするのがSDGsという略語です。

このエス・ディー・ジーズと並んで一並んでというよりはむしろ、エス・ディー・ジーズが目指す十七の目標の一つと言うべきかもしれませんが、特に数年前からさかんに言われているのがダイバーシティという言葉です。これは簡単に言えば「人間は皆、同じではないのだ。いろいろな人がいていいし、皆、同じ人権、生きる権利をもっている」という、言ってみれば、当たり前の考え方、しかしながら、なかなか実現されていない考え方です。

職場や大学で「ダイバーシティ推進宣言」が公表されています。たとえば、同志社大学では、皆さんもすでに読まれたと思いますが、次のとおりです。一部だけ読んでみます。

自身と異なる価値観や境遇を持つ他者を理解し、共生、共存する中で、その違いを新たな創造へ導く力を持つ人物を養成するため、本学は、引き続き以下の取組を行って、ダイバーシティを推進します。

1. 国籍、性別、障がい、性的指向・性自認、文化、宗教、思想信条等、様々な背景を持つ本学構成員が、共に学び、共に働くことができるキャンパスを形成します。

2. 以下は省略します。

同志社大学ホームページ内「同志社大学ダイバーシティ推進宣言」より

(<https://www.doshisha.ac.jp/information/approach/diversity.html>) (2021年8月20日参照)

企業でも、積極的にダイバーシティの推進を宣言しているところが増えています。もっとも企業の場合は、人権意識が高いからダイバーシティを推進する、というよりは、社内の多様性は企業にとって競争力につながる、という認識—企業の利益を上げる論理—が、ダイバーシティを推進する力になっているようです。

地球上には現実にはいろいろな人たちがいます。国籍も違います。顔かたち、肌の色も人さまざま、体格もいろいろです。年齢もまちまちです。赤ちゃんもいれば、高齢者もいます。男、女、そして、そのどちらでもない性、どちらでもある性もあります。職業も、文化も、宗教も、考えていることも、思想信条もさまざまです。価値観も人それぞれです。好みや趣味も異なりますし、食べものの嗜好も違います。人生も、同じものはどれ一つとしてありません。人はさまざまな背景をもち、いろいろな経緯で、今にいたっています。それぞれの苦労や事情を背負い、人と異なる幸福を追求しています。何をとってみても、人はさまざまであり、個性があり、人と異なる自分の世界をもち、同じものは一つとしてありません。

人はそれぞれが違う。このことを今日の私たちは当然だと思います。ところが、人は皆それぞれ違う人たちなのですが、私たちは、社会生活をしていくうえで、自分自身も含め人を理解するために、すでに手垢のついたカテゴリーに人を、また私たち自身を分類してしまいます。一人ひとりの個性をまず見るのではなく、個性をもった人々を既成のカテゴリーに入れ、個人をその色のついたカテゴリーから理解しようとしています。

たとえば、「女」というカテゴリーに入れられれば、「女はこんなことをしちゃいけないよ」とか「女性はこうしなきゃ」と言われます。「男」というカテゴリーに入れられた人は、「男だから、このくらいのことはできないといけない」とか「男はこんなことはしてはいけない」と言われます。今どき、このようなことを言う人は少なくなってきたはいらっしゃるでしょうが、豊かな個性をもった人を、悪気なく、既成のカテゴリーに入れてしまうことは、今日でも珍しくないことなのではないでしょうか。

人は皆それぞれ個性豊かなのですが、その個人を既成のカテゴリーに閉じ込めてしまう。このような個人のカテゴリー化が、社会の中で組織的に行われますと、事態はかなり深刻になります。社会の中で人々の差別化が起こり、就職などにも影響を及ぼすことになります。また、基本的人権が損なわれることにもつながります。

このように見てきますと、私たちをダイバーシティとは逆の方向に連れて行き、ダイバーシティの実現をばむのは、自分自身を含め個性豊かな個人を既成のカテゴリーにあてはめ、個性のもついろいろな色彩

を消してしまうという、私たちの性(さが)なのではないかと考えられます。

そうだとしますと、ダイバーシティを実現するためには、カテゴリーの中にいる個人個人をそのカテゴリーにしたがって見るのではなく、カテゴリーを取り払い、カテゴリーから救い出し、生の人として向き合い、それぞれの人がもっているであろう豊かな世界に関心を向ける。つまり、一人ひとりを大切にする、ということ以外にはないのではないかと考えられます。

ダイバーシティはキリスト教由来

インターネットの「コトバンク」(<https://kotobank.jp/>)というサイトによりますと(2021年8月20日参照)、ダイバーシティは、「もともとは、アメリカにおいてマイノリティー(少数者)や女性の積極的な採用、差別ない処遇を実現するために広がったもの」()は筆者追記)と説明されていました。

この説明ではダイバーシティは割と最近、アメリカで広がった考え方とされています。しかし、ダイバーシティの考え方の基本は、そもそもキリスト教のものの見方です。一人ひとり、どのような人であれ、平等な人権・生きる権利をもっている、という考え方、これはキリスト教の考え方であり、教会ではいにしえから言われていたことで、なにも目新しいことはありません。聖書の中で、すでにパウロはユダヤ人が特別な民族だという従来のカテゴリーの考え方から脱しています。たとえば、ガラテヤの信徒への手紙3章26節以下で、パウロはこう述べています。「あなたがたは皆、真実によって、キリスト・イエスにあって神の子なのです。キリストにあずかる洗礼(バプテスマ)を受けたあなたがたは皆、キリストを着たのです。ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです」(『聖書協会共同訳』)。

キリスト教では、もともとどんな人でも、性別に依らず、年齢に依らず、地位や職業に依らず、住んでいる場所に依らず、背景や経歴に依らず、一人ひとり皆、神の前で平等であり、したがって、いろいろな人がいていいのだ、人は多様でいいのだ、そのままで一人一人は神に愛されている、と教えてきました。

新島の「人一人は大切なり」

新島が「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ。一人ハ大切ナリ」と述べたのは、1885年12月18日、同志社創立十周年記念式においてでした。前日の午後、新島は一年半ぶりに、欧米旅行から帰宅したばかりでした。この日(12月18日)の午前10時から、今私たちのいる、この同志社礼拝堂の定礎式が行われました。新島はこの定礎式のために式辞を述べます。次に、書籍館(図書館、今の有終館)の定礎式が行われました。新島はそこでも式辞を述べます。

午後には同志社創立十周年記念式が行われました。お歴々を来賓として迎えた式典で、新島は式辞を述べます。彼はまず、「過去のことを述べようとすればいろいろあるが、今日は論じない。また卒業生のことについてもいろいろあるが省略する」(『現代語で読む新島襄』同志社 丸善 2000年 184頁)と切り出し、「諸君とともに過去を追想して記念としたいのは、昨年私が〔渡米で〕不在中に同志社を退学させられた人々のことである」(同)と、自らの旅行中に退学になった数名の学生の話を語り始めました。

「ほんとうに彼らのためには涙を流さずにはいられない。彼らは真の道を聞き真の学問をしていた人で

あったが、ついに退学させられることになった」(同)。「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ。一人ハ大切ナリ」—新島は退学者一人ひとりの顔を思い出し、感極まったのでしょう。この言葉を涙にむせびながら語り、満場の聴衆も皆、涙ぐんだと伝えられています。

同志社創立十周年記念の式典で出たこの言葉「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」は、今日のダイバーシティという考え方のもとになる考え方です。ですから、同志社では136年前に、すでにダイバーシティの基本になる言葉が発せられ、これが記憶され、同志社の根幹を成り立たせる言葉の一つとして大事にされてきた、ということになります。新町キャンパスの尋真館の渡り廊下の外壁に、この言葉が刻まれていることは皆さんご承知のとおりです。

「人一人は大切」のキリスト論的根拠

ところで、「人一人は大切」という考え方は、たまたま記念式典の場で、新島が思いつき、口をついた言葉なのでしょうか。そうではありません。では、日頃、自分で練り上げてきた新島独自の倫理思想なのでしょうか。そうでもありません。

すでに述べましたように、この言葉の背景にはキリスト教があります。新島の場合、アメリカ東海岸のキリスト教の世界の中で、「人一人は大切」という思いが、いわば体臭のように新島の体内に染み込んだのだらうと想像されます。

しかしそれにしても、私たち現代日本の者たちにとっては、「一人ひとり大切に」という考え方は、当然のここのように思えます。正直なところ、新鮮には聞こえません。少し意地悪な言い方をすれば、幼稚園でも教えられているような初歩的な倫理のようにも思われます。ごく普通の教えであって、わざわざ新島の言葉を持ち出し、改めて学び直すようなことでもないと考えられます。

しかしながら、「人一人は大切」という言葉は、「みんな、仲良くしましょう」というような標語ではありません。ふんわりしたヒューマンイズムでもありませんし、社会を明るくするための単なる道徳でもありません。

「人一人は大切」という考え方は、根拠のない薄っぺらな思い付きではなく、キリスト教の人間理解に基づいたものです。キリスト教では、個人は、既成のカテゴリーに入れられ、それで尽きてしまうようなものではなく、一人ひとり神に愛されており、個人は、そこにおいて神のいのちが発現している場なのであり、したがって、どの人もどの人も、一人の例外もなく、大切にされなければならないと教えています。

フィリピの信徒への手紙から

先ほどはフィリピの信徒への手紙2章1節から11節までを読んでいただきましたが、そのうちの6節から11節は「キリスト賛歌」と呼ばれており、パウロの時代の集会で歌われていたのではないかと考えられています。とくに6節から8節までのところには、キリストが神でありながら、人間になられ、従順に十字架にかかり、死にいたった、ということが、短い言葉で印象的にまとめられています。

6節には、キリストは神の身分であった、とあります。神話的な表現ですが、キリストは父なる神様と一つなる神であったということです。しかし、神と等しい、ということにこだわらず、7節、かえってご自分を無にし、地上に降りて、僕である人間の身分になられました。キリストはこの世に人間の姿で現れ、8節、姿は人間ですが、神様でありつづけた。神様のままで、へりくだって、十字架による、あの残酷な処刑を甘んじて受

けられた、神は人間以下にまでなられた、ということが書かれてあります。

キリストは天のうへの玉座に座っておられることでよかったのですが、そのことに満足されず、「神」というカテゴリーを自ら放棄され、人間の世界に降りてこられて人間と共に住まわれました。「神」という輝かしいカテゴリーに入れられたまま人間には見えないところで鎮座します神であることを捨て、あえて、人間というみすばらしいカテゴリーをまとわれました。このキリストこそが、まさに神の望み給うた人間の本当の姿です。

キリストは人間という、みじめで、いつも苦しみを伴うカテゴリーをまとわれました。しかし、その中身は人間というカテゴリーで限界づけられません。キリストにおいては、神の「いのち」が充溢しています。このキリストの姿が新しい人間ということなのではありますが、このキリストの姿こそが、本当の人間の姿であると考えられているのです。

今朝のフィリピの信徒への手紙の中のキリスト賛歌は、神話的な表現で、次のことを歌っています。つまり、カテゴリーにもかかわらず、カテゴリーを越えて、人は本来、神のいのちに満たされている—このような人間の在り方をキリストが自らの身体(からだ)をもって啓示されたのだ、と。

一人ひとりに満ちる神のいのち

マザー・テレサの名はまだ忘れられていないと思います。インドのコルカタで貧しい人たちに寄り添った修道女です。このマザー・テレサは、社会から捨てられ、孤独のまま路上に倒れ、死に瀕している名もなき人たちにキリストを見ました。マザー・テレサは言っています。「この人たちは私たちの宝です。一人ひとり、苦しみに身を変えたイエスなのです」(E・イーガン+K・イーガン著 猪原英雄訳『マザー・テレサと幸福への道』サンパウロ 1996年 36 頁)。

人々から無視され路上で死に瀕している人たちでさえ、そこには神のいのちが充溢し、いのちが輝いています。いや、むしろ、無視され捨てられ死に瀕している人たちであるからこそ、そこに神のいのちが輝いていると言ったほうがいいかもしれません。この人たちは、他の人からかぶせられたカテゴリーを乗り越え、というより、そのカテゴリーからさえ下へこぼれ落ちてしまった。そのような生(なま)の人間だからこそ、その中のいのちの輝きがよく見えるようになるのです。

誰もが実は放っている、この生き生きとしたいのちの輝きを、私たちは、既成のカテゴリーで枠づけし、見えないようにしてしまわないようにしたいものです。カテゴリーに価値の順列をつけ、その価値づけにしたがって、個人をも価値づける—というようなことはしないようにしたいものです。

皆さんも、ご自身を既成のカテゴリーの中に入れてしまい、そのカテゴリーによってご自分を見限ってしまうことのないようにしていただきますように。

皆さんもちろん含め、すべての人たちが、一人の例外もなく、皆、大切です。私たちはいくつかのカテゴリーの中に入れられ、分類されてしまっていますが、それにもかかわらず、一人ひとりには神のいのちが充溢し、そのいのちが輝いています。

実際のところ、社会の中で生きていく時には、私たちは、カテゴリーを用いざるをえません。大学の中にも、学生、教員、職員という、それぞれのカテゴリーに属する人たちがいます。これらカテゴリーの分類がなければ、社会は混沌としてしまい、機能しません。

しかし、それは社会の機能のレベルの話です。レベルを混同するわけにはいきません。今話しているのは、かけがえのない人生を生きる、かけがえのない一人ひとりのレベルの話です。

私たちの力では、すべての人の人生に関心を向けることはできません。しかし、私たちの隣り人として送られてきた人たちに関心を向けることはできます。私たちの隣り人に向き合わず、既成のカテゴリーをかぶせ、そのカテゴリーの優越にしたがって、その人に優越をつけることは、絶対にやめたい。

一人ひとり大切です。

カテゴリーを取り外してみれば、一人ひとり神のいのちに生かされており、個性的で、多彩で多様です。そのことに気づき、そのかけがえのなさに関心を寄せてその人の声に耳を傾け、その人のかけがえのない世界に目を向けていきたい。

それが人を大切にすることであり、隣り人を愛することです。

2021年11月24日 今出川水曜チャペル・アワー「創立記念礼拝奨励」記録